

## ■研究調査レビュー

## 魅せられて奄美－黒の宝島

原口 泉（鹿児島大学法文学部）

奄美をはじめて見た田中一村画伯は、その印象を、「黒き奄美」と表現している（昭和33年12月17日、和光園芳名録）。同月13日未明、船上から奄美の姿を見たからであろう。

私が奄美を黒色のイメージで捉えるようになったのは、奄美の歴史研究からであったが、今は奄美の持つ自然の奥深さがそのイメージをさらに強くしている（原口泉「奄美の黒い輝き」2000年10月7日付、南海日日新聞）。

歴史的な理由は江戸時代の奄美の貢納・贈答品が、黒砂糖・黒ツグ（棕櫚）・泥染紬・黒豚（島豚）・黒麴黒糖焼酎などであったからである。とくに黒いダイヤと言われる黒糖は専売制のもと、薩摩藩の天保改革の大黒柱となり、日本一の赤字財政を黒字に大転換させた。元和9（1623）年、藩は新しい征服地である奄美に統治の方針を示したが、その中に「諸百姓、なるべき程しやうちう（焼酎）を作り、相納むべき事」と規定している。この場合、清酒用の黄麴ではなく、雑菌に強い黒麴であったと思われる。現在では、このほかクロマグロ・黒真珠の養殖（瀬戸内町）、アマミノクロウサギ（全身黒褐色、国特別天然記念物、大島・徳之島の日本固有種）、トゲネズミ（国天然記念物、黒褐色、大島と徳之島）、カラスバト（国天然記念物、ほぼ全身真っ黒、奄美はじめ県内離島）、クロサギ（奄美各地の岩礁）、クロヅル（徳之島）、クロカメ（笠利町）、クロエビ、クロフジツボ、クロ（メジナ）、シイタケなどクロのつく動植物が圧倒的に多い。黒い巨体がぶつかる徳之島の闘牛、島唄のクルタンド節など奄美は黒く彩られた世界なのであり、黒の宝島は黒潮の恵みとあってよい。黒潮は、巾50～100km、深さ1000m、每秒

5000万トン（平均時速3ノット）の大海流である。中国では「黒溝」、伊豆諸島では「黒瀬川」と呼ばれる。黒潮は濁りが少ないため、緑や黄色の光が下方まで到達しやすく、紺青色ないしは黒っぽく見えるのである。日高旺氏は『黒潮の文化誌』の中で、漁師が黒潮を「クゾメの色」と呼ぶことを紹介しているが、黒染めの反物の色のことであるという。

黒潮に沿って春一番に吹く南風を古来、鹿児島では「黒南風（クロバエ）」と呼んでいる。この風は梅雨の前触れであり、農事暦でももっとも大切な田植え時期の到来を告げるものである。

黒色といえば、縁起でもないという誤解や偏見がある。おそらく黒い喪服や、カラスに一因があろう。ちなみに「サヨリみたいな人」とは腹黒い人のことである。しかし現在の常識もその歴史的由来をたずねてみると案外根拠の無いものが多い。たとえば、東アジアの中で喪服が黒色なのは日本だけであり、それも古代においては白い喪服が一般的であった。またカラスは古来、熊野信仰の神鳥とされ、起請文の料紙にカラス点が用いられている。また山川町では厄除けのため、家の入り口にカラスをつるしていた。

さらにグローバルな視点でみると、黒は高貴さを表す色に変わる。イタリアのミラノでは、ブラックノアールというそうである。奄美で薬膳料理店（新徳花）を営んでいる久留ひろみ氏は、対談の中で、こう語ってくれた。

「大島紬は本物の黒です。ミラノのファッション界もこんな色は出せないと注目するほどの洗練された黒なのです。品がいいんです。

裏地にしても帯にしても、まさに文化そのものの。削ぎ落とした美しさ、シンプルな美しさが大島紬にはあります。大島紬独特の泥染めは、まわりに自然の田んぼがあって、その一部分で泥染めをやって「黒」を作り出す染色法です。」(『文藝春秋』平成14年10月号)。

私がかもっとも驚いたのは、愛加那(西郷隆盛の島妻)の墓がある龍郷町の弁財天(フジテン)堂墓地で「黒加那」の墓を見つけた時である。自分のかわいい娘に黒と名付けることは、黒がプラスイメージだからであろう。同じように、女性名に「ナベ」「カマ」や「ウシ」「ブタ」が多いのも、家の中で一番大事なものが鍋、釜、牛、豚だからであろう。県本土でもかわいい女の子のほめ言葉に「黒豚ん子ごとむぞか」といっていたという。

大島大和村の津奈久では、津奈久焼という薩摩焼の黒モン(黒薩摩)を明治時代に焼いていた。黒糖焼酎に黒薩摩と大島紬、奄美いや鹿児島に、誇りと自信を与えている伝統産業である。それぞれがほかにはない個性的なもので黒い輝きを持っている。印象派の画家マネ(1832~1883)は、人から「マネにはかなわない。彼が黒を描くときは輝いている」と言われたという。黒を使って描くことは、ヨーロッパの絵画の世界でも難しいことだったことがわかる。薩摩焼の中でも黒モン(黒薩摩)は使い勝手がよく、役に立つこと、すなわち「用」を極めた「美」の作品である。

郷土料理でおすすめの絶品は、「マダジル」というイカスミ汁、ただし口の中が真黒になる。

最後に奄美の魅力は島唄に尽きる。それは正月の祝い歌にはじまる。「あらたまる年に炭と昆布(く一ぶ)祝て 親むつれ 子(くわ)むつれ かふな祝」

あらたまる年に炭と昆布をつるした七五纏を飾り、親子そろって仲むつまじく新年を祝う習俗は、今は沖縄県糸満市に残るばかりである。「かふな」は島言葉で、果報でめでたい

という意味。

次に喜界島に伝わる民謡。「黒(くる)ふんぎぬ下 なんてぬば 待ちゆる をなご 色や白々と 待ちゆるきよらさ」

黒ふんぎ(クロウメモドキ科クロイゲか)の木の下で待っている色白の乙女の美しさを歌いあげたもので、黒と白の対比がすばらしい。以上の島唄と民謡は橋口満「かごしま言葉の泉」(南日本新聞連載中)よりの引用。

女性の黒髪を讃えた新民謡「島育ち」(昭和14年)の歌詞が思い出される。「黒潮(くるしゅ)黒髪 女子(うなぐ)身の恋(かな)しや 想い真胸に 想い真胸に 織る島紬」

極めつけは「黒(くる)だんど節」であろう。「黒だんど」とは空の黒ずみのことで、もともとは雨乞いの唄であったともいう。

黒く彩られた奄美の世界は私たちを魅せて止まない。黒糖焼酎に奄美の心を嗅ぎ、大島紬の黒に自然と人間の奥ゆきを感じるのは私だけではあるまい。「黒糖地獄」は苛酷な奄美の歴史が込められた言葉であるが、奄美が本土にとって「母なる奄美」であることに変わりはない。

シイやマツなど常緑樹林に包まれた奄美、常緑樹の一本一本は黒いわけではないが、層を成して密生すると暗い色になって見えるところから「黒山」という言葉も生まれた。この豊かな自然と生態系を世界人類の自然文化遺産とする動きは今始まったばかりである。

関連文献；原口 泉「鹿児島・黒の文化」  
(『鹿児島県・石川県地域文化交流会記念誌』'05年2月刊、所収)